

Title	英国外交に関する一視点：ズデーテン問題をめぐって
Sub Title	
Author	藤原, 共代
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.99(363)- 100(364)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英国外交に関する一視点——

ズデーテン問題をめぐって

藤原共代

第二次世界大戦勃発の約一年半前にあたる一九三八年三月、独欧合併後、ズデーテン問題が表面化し、事態が悪化すれば戦争にもなりかねない様相を呈してきた。当時から、チェコスロヴァキア国内のズデーテン・ドイツ人の自治権要求運動の中心となつていたズデーテン・ドイツ人がナチス・ドイツの影響下にあり、この問題が本質的にはナチス・ドイツによるチェコ侵略行為であつたことは明白であつた。問題に対処する為に開かれた英仏会談に於いて、この問題に関する主導性を握る英国は終始ドイツを抑えることではなく、チェコ政府がズデーテン・ドイツ人党に対し最大限の譲歩をすることによつて、問題解決をはかろうとした。フランスは、外交上に於ける対英依存性が顕著であり、英国の見解に追従した。その英国の意図の中には、既に早くからドイツに対しズデーテン地方を割譲することが含まれていたことは明らかである。

以上の英国の積極的なる対独宥和の方針を次の二点から検討してみた。

一、対独宥和政策が、不可避的な戦争に向つての軍備準備の為

の時間かせぎの政策であるという論義がある。しかしながら、当時の英国では軍備、国防の必要が根本的なものであるとは考えられていなかつたといえる。軍備計画は、ミュンヘン会談に至る迄、国内の経済上のバランスから決定され、決して通常生活を混乱させる程のものではなかつた。更に、チャーチルの如き対独強硬論者が全体としては少数派であつたことから、一般に、英国から遠く離れた一地方の為に、英国が戦争をする必要はないとの空気は支配的であつたといえよう。国内の動静から検討するかぎり、当時の英国外交は「軍備の不準備」から対独宥和をとらざるをえなかつたというより、むしろ戦争は不必要であるということから英国自身の戦争回避の手段であつたようにみえる。

一、ズデーテン問題処理に関し、チェコの同盟国であるソ連が終始無視された事実をとりあげ、宥和政策を「反ソ四国協定案実現の為の陰謀」であるとする説がある。チェンバレンが親独反ソ的傾向のクライヴデン派と密接である伝統的保守派であることや、多くの外交資料によつても、思想的に反ソ的色彩の強い英仏独伊の四国による連合構想を抱いていたことは否定しがたい。しかし、ズデーテン問題の展開過程に於いて四国協定案は、数回の提案にもかかわらず、その度毎に政府の拒否にあつていたのである。ソ連を会議から除くことによつて、余りにもはつきりと反ソの態度を表明することには躊躇があつたと思われる。よつて、英国が反ソ四国協定の実現の為の目的政策を積極的にとつていたというのは早計であろう。もとより、ドイツの領土的発展が少数民族の問

題にかぎるといふ楽感的な対独認識に加えて、反ソ的障害としてのドイツの存在を考えれば、対独戦争の必要性を認めないのは当然だろう。もしドイツによるチェコ攻撃が起ると、立場上、英国も対独戦争に巻き込まれざるをえない。これを回避するには、チェコに圧力を加えることによりドイツを満足させ、更にドイツをしてソ連を牽制させれば好都合であると考えたのかもしれない。いずれにせよ、以上の考察からかんがみて、ズデーテン問題処理にあつての英国外交が明確なる長期的目的意識によつて決定されていたとは云いがたい。

つまり当時の英国外交は、ズデーテン地方割譲という形でドイツを満足させることにより、英国自体がドイツとの戦争を回避しようとする、きわめて現実的な戦争回避の要請の結果に他ならなかつたように判断される。

(本塾大学院文学研究科修士課程在学)

現代の歴史的思考について

雄 上 統

「東は東、西は西」(キップリング)ということばはもはやなつかしいことばになつたともいえる。なぜならわれわれ現代人は世界の単一化あるいは統合化という時代に生きているからである。

例えば現代の哲学者あるいは文明批判家ともいえるオルテガ・イ・ガセットはつぎのようにそれを表現している。「今日では、平均的人間の生の内容が地球全体を包括しているのであり、各人は常時世界を生きているのである。地球上のいかなる部分といえども、もはや自己に与えられた地理的位置に閉じこもつてはおらず、地球上の他の場所に働きかけ多くの生的作用を及ぼしているのである。そればかりか世界はまた時間的にも増大した。」

オルテガはさらにつづけてつぎのようについて、「しかし、世界のかかる空間的・時間的増大も、それ自体では何の意味をも持たないであろう。物理的な空間と時間は、宇宙における完全に無意味な部分である。」

いかにしてこの現代の世界の空間的・時間的増大を位置づけ、意味のあるもの、われわれの理解しうるものにし得るのであるか。

これが現代の歴史家に与えられたひとつの使命といわなければならぬであろう。

トインビーはその著『歴史の研究』の中で、「総じて歴史は、創作的要素を完全にぬぐいきれないという限りにおいて、イースリアスに似ている。さまざまな事実の選択、整理および提示は、創作の領域に属する方法であり、したがつてひろく認められているように歴史家は同時に偉大な芸術家でない限り偉大ではありえないのである」といつて、さらに歴史記述様式の三種類、第一に「特定の事実の確認と記述」、第二に「法則の解明と形成」、第三に